

Title	「物質主義的定義」と「稀少性定義」の思考様式に於ける差異
Sub Title	Difference on the way of thinking between "materialist definition" and "scarcity definition"
Author	富田, 重夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1950
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.43, No.3 (1950. 9) ,p.159(23)- 176(40)
JaLC DOI	10.14991/001.19500901-0023
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19500901-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うか。短期的觀點の採用が、資源問題に關してもいえる如く、アジア貿易についてもその準戰時的乃至戰時的編成を要求しないであらうか。しかし餘りにも政治的な考慮を加味することは、アジア貿易の展望を偏せしむるものとして避くべきであらう。

われわれとしては、アジア經濟復興の促進を究極の念願として、あらゆる事態に備えて及ぶ限り自力による所のアジア地域内相互貿易の擴充、そしてさらに廣くアジアの經濟的協力具現の方向に則して、アジア貿易再編成の過程を一步一步積む覺悟と用意が肝要であらう。したがつてそこには又、上述の構想とは別に廣く中國市場を包含しての構案も浮び出ることを忘れてはならない。

(一九五〇・七・一六稿)

『物質主義的定義』と『稀少性定義』の 思考様式に於ける差異

富田重夫

一 序

茲に私が論ぜんとするところは、かのライオネル・ロビンズがその著『經濟科學の性質と意義に關する一試論』^(註1)に於いて、經濟學の定義に關し「物質主義的定義」(Materialist Definition)と「稀少性定義」(Scarcity Definition)なるものを挙げ、これらと比較検討したことについて、此等の定義に於ける「もの」の考え方、把え方、即ち「思考様式」が如何なるものであつたかと云うことである。元來、苟くも何らかの立言がなされる限り、そこには常に何らかの思考様式と云うものがなければならぬ。従つてそれはとりわけロビンズの二つの定義に限つたことではなないのであつて、茲に特にこれらを探上げた所以は、第一にかかる定義の問題は畢竟「經濟とは何か」と云う經濟哲學の窮極的問題であること、次に若しロビンズやJ・S・ミルの云う如くかゝる問題が科學が「最後に到達するところの眞理、一般化の最後の段階の結果」^(註2)謂わば最後の締めくくりであるとすれば、この定義の問題に於ける思考様式

「物質主義的定義」と「稀少性定義」の思考様式に於ける差異

二二 (一五九)

は、それに依つて締めくくられるべき科學の諸法則のそれを表明しているものと推論せらるべく、又事實「物質主義的定義」の思考様式は主としてかの古典學派の、「稀少性定義」のそれは主としてかのオーストリア學派の思考様式を、それ／＼端的に表明していると考えられるが故である。

然らば一體かゝるもの考え方、把え方と云うことを何故に問題とするか、又抑々ものの考え方、把え方とは如何なることを意味しているか、について先づ簡単に述べておく。苟もものを認識するというからには、それは具體的になければならない。併し如何なることが眞に具體的なる認識であるのか、先ず考え得べきことは何らかの具體的なこととがらを論じていると云うことである。併し論じていることがらが具體的であると云うこと——例えば人々が往々これは歴史的事實である、或いは統計的事實であると云う場合の如き——は、必ずしもその論議が具體的であると云うことではない。論議が具體的であるためには、具體的のものを考え、把えるのでなければならぬ。然らば眞に具體的なもの考え方、把え方とは如何なるものでなければならぬか、或はその前に抑々從來の經濟學に於いて、それは如何なるものであつたか、かかることが問題とせられなければならないと思ふ。特に最近の科學の諸部門に於ける發展が、單にその對象の内容のそれのみではなくして根本的にももの考え方、把え方の變革であつたことを考へるとき、これらの變革は科學の特殊部門に於けるそれとして見られるに止まらず、科學の認識一般にとつて深く考察せらるべき意義を有していると思ふのである。

次に茲にももの考え方、把え方と云うのは如何なることを云うのであるか。それは先ず單に所謂認識主觀の方法、主觀がそれを以て客觀を整理すると云う如きを意味するのではない。我々は認識と實踐とを對照的に考へる。確かに認識は直ちに實踐ではない。而して認識すると云うことは何らかの意味で現實を否定し對象化するところに成立する

のである。併し現實を否定すると云うことは、現實を現實の外から否定することではなくて、實は現實そのものの自己否定でなければならない。即ち現實の否定そのものが現實に於けることがらなのである。それは恰も世の中を逃避すること自體が世の中の出來事である如くである。認識すると云うことも現實に於ける現實否定と云う一つの人間の働きであり行爲である。「知るといふことも一種の實踐でなければならない。」^(註4)もの考え方、把え方と云うのはかかる意味に於ける現實否定の在り方である。それは主觀と客觀がそこに於いて相互に限定する現實そのものが自己を明らかにする道であると云うことが出来る。それは「實際の (actual) 研究を決定する」^(註5)意義を有していなければならぬ。茲に於いては、認識の所謂認識論的考察に代つて、認識の主觀も客觀も「有るもの」として、「有るもの」の學、認識の形而上學的考察がなされなければならない。私は右の如き意味に於けるもの考え方、把え方と云うものをロビンズの二つの定義に關して説明して見ようと思ふのである。なおかかる研究はK・レヴィンが彼の「所謂トポロギーの心理學」なる心理學上のDynamicsを建設するに當つてなしてゐることがらであることを附記して置く。

(註1) Lionel Robbins, An Essay on the Nature and Significance of Economic Science, 1st ed. 1932, 2nd ed. 1935.

(註2) J・S・ミル『經濟學試論集』末永茂喜譯一五八頁。

(註3) 自然科學一般に於けるそれについては下村寅太郎『自然哲學』又心理學についてはK・Levinの著 The principle of Topological psychology 及び Dynamic Theory of personality を参照。

(註4) 西田幾太郎『哲學論文集第二』一六七頁。

(註5) K・Levin, op. cit., Dynamic Theory, p. 1.

二 物質主義的定義

ロビンスが經濟學の定義と云うことを更めて問題とした意圖は、即自的に定立された諸々の經濟法則に關してそれらに一般的な對象が一體何であるのか、即ち經濟法則が一體如何なる對象に關する法則であるのかを明らかにせんとする方法的反省に依つて、新たな經濟理論の發展の基礎を提供せんとしたところにあるのであるが、先づ彼は從來の經濟學の定義を「物質主義的定義」——これに屬するものとして、彼はキャンナン、マーシャル、パレート、J・B・クラークを擧げている——と稱し、この定義に依れば經濟學とは「物質的厚生の原因を研究する」學であると云う。^(註1)これより經濟的財貨と云うのはかかる厚生に役立つ財貨であり、又經濟的行爲と云うのはかかる財貨に關係する行爲と考えられる。要するにこれは「經濟的」即ち「物質的」と云う極めて常識的な定義である。併しまさに常識的であるが故に、抑々物質的と云う如きそれ自體曖昧な概念が何を意味しているかを限定しなければならぬのであるが、その内容的規定は暫く措き、いま茲で物質主義的定義の思考様式如何と云う觀點からすれば、第一に注意すべき點は「物質的」と云うことが「非物質的」と云うことと所謂二分法的(dichotomous)に考えられ、それらが客體全體の異つた一つの領域若しくは部分として考えられていようと云うことである。更にかく二つの領域に區分せられるのは、その各々に屬する性質に依つてである。即ち一つの客體はそのものに固有な或る性質に依つて、經濟的であり、他方もう一つの客體は又そのものに固有な或る性質に依つて、非經濟的であるのである。「物質的」、「非物質的」と云うことは、それらが如何なる内容的規定を有するにせよ、客體自體に固有な屬性を示すものとして考えられてい

るのである。これはK・レヴィンがまさに「アリストテレス的思考様式」と云つているところのものであるが、茲で

この物質主義的定義の思考様式を明らかにするために、アリストテレスの實體について考察しておこう。

アリストテレスは實體(自體的存在)を第一實體と第二實體とに分ち、前者即ち第一實體とは「如何なる主語の述語ともならず、また如何なる主語(基體)のうちにも有さぬものである。例えばこの人とか、この馬とか云われる個體である」^(註2)と云う。この第一義的に存在するもの、即ち個體と云うのは、所謂特殊と一般、種と類(例えば赤と色)の包攝關係に於いて、之を無限に特殊化した極限と考えられるものであるが、最後の種差に依つて到達する個體なるものは、單にこの特殊化の極限ではなくして、逆に種、類を自己の屬性として含むところの一般の一般である。種、類はかかる個體の屬性として第二實體と云われるもの、所謂類概念(class concept)であつて、主語個體の述語となるものである。この類概念と云うものはアリストテレス的思考様式に於ける重要な概念であつて、これは一群の個體に共通なるもの、即ちそれらの個體の個別性の抽象或いはその平均化に依つて得られるところの、それらの個體が共通に有するところのものである。而してこの共通なるものこそ、それらの個體の本質と考えられるものであつた。かくしてものを規定することはかかる意味に於ける本質を明らかにすることである。それは本來その個體に屬する性質を明らかにすることである。かくの如くしてかかる規定はその個體が如何なる時間、如何なる場所に於いてあるらうと、かかる時・空的制約に無關係に、これらより抽象化され、孤立的に取り出された個體自體に就いてなされる規定である。従つてこの規定はその個體にとつて固定的であり絶対的である。例えば「湯呑は茶をのむ道具である」と云えばそれは湯呑がそのままに私の机上にあらうと、嘗つて或る商店に於いてあらうと同じく妥當する。湯呑は四六時中(the whole day long, twenty-four hours out of the twenty-four)茶をのむ道具でなければならぬ

「物質主義的定義」と「稀少性定義」の思考様式に於ける差異

い譯である。

さて我々は物質主義的定義に歸つて見るに、これに於いては、或るものが經濟的であると云うのは右に於ける如くそのもの自體に屬する性質に於いて物質的なるが故であつて、これは如何なる時・空を問はず常に經濟的なりと云う抽象的固定的規定であるのである。或る一群のものが物質的なる性質を共通なるものとして有するならば、それらのものは存在する限り常に經濟的でないからないのである。

ところで經濟的なるものは何らかの意味で人間の欲望や労働と關係を有する。經濟學はその成立の當初より種々の學說にも拘わらず、何らかの「物の知識」であると共に「人間の知識」であつた。物質主義的定義に於ける「物質的厚生」と云うものも人間のそれであることは云うまでもない。それではこの定義に於いて「人間」と云うものは如何に考えられているか。^(註3)

結論をあらかじめ云うならば、この立場に於いては、人間と云うものも所謂物と同様に前述の思考様式に於いて考へられているのである。これについては古典學派の中により説明を見出す事が出来る。例えばミルは經濟學は「唯、富を所有せんと欲し、且つこの結果をうるための諸手段の比較的有効性を判断しうる存在としての人間にのみ關係する」と云う。^(註4)而してかかる人間性は人間そのものに屬する一性質と考えられ、物がかかる人間性と對象的に對應しているのである。ここでは人間もその於いてあるべき具體的關連とは無關係に、それより抽象化孤立化されて考へられているのである。或はまたアダム・スミスが經濟的世界と道德的世界を人間の自然の本性たる利己心と利他心に相應して區別している場合に於いてもこのことは考察されるところである。杉村廣藏氏が客觀主義時代の考へは「歴史を通じて普遍化を試み、その概括した結果を利己とか利他とかいふ人間自然の性状とよぶもので説明する」と云うの^(註5)

もこの間の事情を説明するものである。かくして又ミルによれば、經濟現象とは「物質に關する一個または數個の法則と人間精神に關する一個または數個の法則との共同作用から生ずる」^(註6)ものであると云われたのである。彼はこの二つの屬性は著しく異ると云つてはいるけれども、實は人間に對しても物に對すると同じ考へ方、把え方を以てしているのである、謂わば人間をも物として把握しているのである。人間と物とが相交ると云つてはいるけれども、實は物と物とが對象的に相關聯するに過ぎないのである。これはアリストテレスに於いて所謂物も人間も、すべての存在が、前述の主語となつて述語とならない存在、即ち主語的存在と考えられていることに相應する。斯くしてかかる思考様式に於いては、ものの有用性と云うものもそのものに固有な屬性の如くに考へられる。ものの有用性は欲求的人間にとつての有用性なのであつて、人間の欲望とは無關係な所謂物理化學的性質とは根本的に異つた規定性であるのにも拘わらず、恰もものに固有なるものの如くに思考されるのである。

近代の科學的實在は時間に於いて變化するものであつた。この物質主義的定義の立場からは、運動、變化、従つて時間と云うものは如何に考へられたであらうか。この立場に於いては、運動と云うも、その原因・結果・目的の何れもが、右に述べた如きもの本質であつて、ものはそれ自體に依つて他の事情にして等しければ、遂にはそのあるべきところ即ち本質へ向つて行く。従つて運動の歸結も豫め本質として與えられているのである。そこには未來と云うものはない。従つて又豫想と云う如きものも理論構成そのものの中には入つて來ない。時間はすべて過去化され空間化された直線的時間に過ぎなくなる。所謂古典學派の時間或いは變動とはかかるものであつたと私は解する。試みにリカードの價值修正論に於ける時間を見よ。これを物理的時間と呼ぶならば、彼等がかかる物理的時間を以て資本の運動という如き歴史的社會的なるものを論じたことと云うことが出来るのである。

「物質主義的定義」と「稀少性定義」の思考様式に於ける差異

以上に論じて來た物質主義的定義の思考様式に關して最も重要な點は次の二點である。即ち(一)ものがその於いてある具體的個別的時空、空間より抽象化孤立化され、かくしてもその規定がそのものに固有なものと考えられていること、(二)人間も所謂ものと同様に單に主語的存在として考えられていること。而してこれらは我々の認識主觀と云うものが對象の外に立つ觀察の眼に過ぎないことに基いてゐるのである。

(註1) Robbins, (p. cit., p. 4.

(註2) アリストテレス選集「範疇論」田隆譯七六頁。

(註3) この點は所謂「説明と理解」と云われるものとも關聯して、兩思考様式の差異を知るのに重要な點である。

(註4) ミル前掲書一七六頁。

(註5) 杉村廣藏「經濟學方法史」一四八—九頁。

(註6) ミル前掲書一六八頁。

(註7) この點はレヴィンがその動學理論を展開するに當つて重要視したところである。

For aristotle, every object tends, so far as not prevented by other objects, toward perfection, toward the realization of its own nature. (This nature is that which is common to the class of the object.) (Op. cit. p. 27)

The kind and direction of the physical vectors in Aristotelian dynamics are completely determined in advance by the nature of the object concerned (Op. cit., p. 28)

三 稀少性定義

さてロビンスは右の物質主義的定義に關して次の如き批判を下している。即ち前述の如くこの定義は二分法的分類に依つて經濟的なるもの、即ち物質的なるものとなすのであるが、併しながら抑々かかる物質的なるものと非物質的なるものとの時間や資源の分配と云う問題が既に重要な經濟的問題でなければならぬ。それにも拘わらず、この定義

からは、かかる問題は經濟學のそれより除外せられざるを得なくなる^(註1)。ロビンスはここにこの定義に對する批判

點を見出し、彼自身が採るところの稀少性定義をなすのである。先づ之に依れば「經濟學とは諸目的と交代的諸用途を有する諸々の稀少な手段との間の關係としての人間の行爲を研究する科學である。」而してかかる定義を導出するに、彼はロビンソン・クルーソー經濟より出發し、次の四つの條件の下に於いて經濟的^(註2)局面 (economic aspect) が發生すると云う。即ち(一)孤立せる個人は實質所得と閑暇の双方を共に欲する。(二)而も彼はそのいずれの目的、欲望を充たすにも充分な手段を有していない。(三)併し彼は彼の時間や資源をこれらのいずれの目的、欲望の享受にも費すことが出来る。(四)これらの諸目的の諸々の異つた組合せに對する彼の欲望は極めて例外的な場合を除いて相異つてゐる。かくして、かかる四條件の下に於いては、彼は選擇をなさねばならぬ。彼の有する時間と資源の分配はここに彼の欲望體系と一聯の關係を有し、そこにこそ經濟的^(註3)局面が成立するのである。およそ以上の如きがロビンスの稀少性定義の要旨である。

さてこの定義の思考様式は如何なるものであらうか。第一に明らかなことはここに於いては經濟的と云うことが、ものそのものに固有な絶對的な屬性ではないと云うことである。客體的にはそれが如何なるものであれ、それが右の條件の下に於いてある限り、即ち或る一定の人間とものの關聯の中に入り來る限り、經濟的となる。客體的にはその全分野が經濟的たりうる可能性を有する。逆に云えば、同一の客體がその於いてある條件、關聯を異にすることに依つて經濟的ともなり、非經濟的ともなるのである。C・メンガーは云う「財の經濟的又は非經濟的性格は財に附着せるもの、財の屬性ではなくて、いかなる財もそれが上述の數量關係(需求が支配し得べき財數量より大なる關係)に

「物質主義的定義」と「稀少性定義」の思考様式に於ける差異

入り込む場合には内的屬性又は外的契機の如何に関わりなく經濟的性格を獲得するし、またこの數量關係がその反對に轉化する限り、その經濟的性格を喪失するのである」と。^(註4)所謂効用と云うものが財に固有なものでないと云われるのもこの爲である。それは人間とものの關聯全體が生み出す或る状態に於いて成立するものなるが故である。局面とはまさにかかる状態を示すものである。^(註5)

さて右の事から我々は一つの重要な結論を導き出すことが出来る。前の物質主義的定義の思考様式に於いては、もはその瞬間に於いて置かれていた關聯状態から抽象化孤立化せられてそのものに固有な本質が求められた。具體的個別性を失つて、時空を越えたものが求められた。然るに稀少性定義に於いては、その瞬間に於いて人間とものが或る状態にあると云うことから經濟的局面と云うものが考えられているのである。局面と云うものは客觀的に常に存在すると云う如きものではなくして、人間とものが相合するの時に應じて成立する状態を意味するものである。従つてかかる經濟性の定義はその瞬間に於ける具體的個別的状态に適應しているのである。それは具體的個別性の捨象或は平均化に依る一般性ではなくして、この個別性に即して成立する普遍性を有するものと云うことが出来る。いよいよここに於ける普遍性である。これは恰もかの相對性理論が單に事物の相對性を主張する歴史學派的相對主義に非ずして、時間空間を相對化するに依つて却つてより普遍的に妥當する客觀的法則に到達した如くである。これは一見極めてパラドキシカルである。即ち一方からは對象の全分野が經濟的たりうる可能性を有するものとなり、全對象界が同質化(homogenise)されると共に、他方その瞬間に於ける個別性に適應する個別化であるが故である。併し稀少性定義に於けるこの事實と意義とを正しく認識することが極めて重要である。

さて稀少性定義に於ける認識主觀、及びその經濟的局面に於ける人間、更に人間とものの關係とは如何に考えられるものであろうか。物質主義的定義に於いては既述の如く人間も主語的存在として考えられ、従つて人間とものの關係も主語的存在と主語的存在の關係、ものとの對象的關係と云う外はなかつた。而してかく考えられたのは、その認識主觀が對象の外に立つ第三者としてその對象規定に何ら積極的意義を有しないものであつたからである。併し一體人間存在とは如何なるものであるか。それは又もの存在と如何に異なつてゐるのか。ものが存在するとは前述の主語的存在として有るのである。併し人間はものを映すことを知ることによつて働く動物である。それは意識的であり、意識する者でなければならぬ。併し意識する者とは所謂物ではない。意識と云うものは、例えば人間は二本の足を有すると云う如き意味に於ける人間の屬性ではない。映すものと映されるものとは決して同一の次元にあるものではなくして、前者は後者に對して超越的でなければならぬ。即ち意識は單に個物の屬性でないのみならず、個物をも越えて之を包むものでなければならぬ。従つて意識するものは主語的存在ではなくして、之を包む述語的存在と考えられなければならない。更に人間はものを知るのみならず、自己自身を知る自覺的存在である。それは單に意識する存在ではなくして意識を意識するものであり、種々なる意識を統一するものでなければならぬ。而して意識は誰かの意識である。それは自己「私」の意識でなければならぬ。併し意識は自己の意識であつても自己は單に意識ではない。物は存在し且つ作用する。人間は單に知る即ち意識する者ではなくして知つて働く者である。かかるものとして始めて我々は欲求する自己であるのである。我々が右に考察した經濟的局面に於ける人間とは、かかる意味に於ける欲求的自己でなければならぬ。物を知るのみならず自己自身をも知るものである。それ故にかかる立場に於ては單に「客觀的に存立するものはつねに物か物の數量に過ぎず」、價值と云うものは「自己の支配下にある財が自己の生命及び福祉の維持に對して有する意義に關し經濟人の下す判斷であり、従つて經濟人の意識の外には存在

「物質主義的定義」と「稀少性定義」の思考様式に於ける差異

しない」のである。(註6) 財の價值とは意識的なるものの財に反映されたものである。従つてかかる意味に於ける價值の比較とは諸意識を統一する主體に於いてのみ可能である。かかる自己とものとの關係はもはや單なる同列的なものとの對象的關係ではない。我々の自己が外を映す(ものを内在化する)ことに依つて内を知り(自己自身を意識し)、自己自身を知ることによつて之を外に反映する(ものに移轉する)のである。經濟人が自らその諸目的を知ると共に物の交代的用途を認識し、更に兩者の因果關係を意識することによつて極大満足を目指す合理的活動をなすところこそ經濟的的局面が成立するのである。原子は原子であつても主語的原子ではなくして述語的原子であるのである。併し問題の核心は、その體系が我々の認識や合理的活動に媒介せられていると云ふ點にあるのではなくして、ものと人間の關係がその關係そのものの中に於いてある人間自身に依つて見られていると云ふ點にある。單なる第三者的主觀ではなくして、對象界そのものの中に於いて働く自己の内省的認識に依つて把握せられた體系であると云ふ點に在る。それ故にこそ、かかる體系に於いては自己のあるところに常に現在點を有し、従つて未來を有するのである。そこでは時間は單なる客觀的時間、唯一の時間ではなくして意識的時間として相對的である。自己の立つところを中心として時間は單に直線的でなく、圓環的統一を有するのである。

以上の稀少性定義の要點は次の二點にある。即ち(一)ものが孤立的に抽象化せられず、ものと人間との行爲的關聯に於いて把えられていること、かくして客體的に全領域を覆うと共に無限に個別的なるものに適應していること、(二)人間が主語的存在としてではなく、述語的、自覺的存在として考えられていること、之である。而してこれらは關聯そのものの中に働く人間の内省を通ずる認識に基いているのである。

四 若干の問題點

最後に右の稀少性定義に關する若干の問題點を論ずる。そのために前述の四條件の下に於ける「人間」と「もの」及びその「關聯」、更にこれら貫く「内省」の原理について實質的に考察しよう。

先づその「人間」、所謂經濟人について、それがクルーソー的個人として人間對人間の社會的關係から孤立化せられていことに對しては、更めて多くの批判の言辭を加えようとは思わない。問題はむしろその克服の方向にある。而して特に注意すべき點は屢々論じて來た如く、かかる孤立化が主語的存在のそれではなくして、述語的存在のそれであることである。今日如何なる立場を探るにせよ、單にクルーソー的個人を以て事足りりとするものはないであらう。何らかの意味に於いて人間は社會的動物であると考えられる。併し社會的なものとは如何なるものであるか。先づ一つの考え方として、この稀少性定義の立場を探るものは、先ず何處までもかかるクルーソー的個人を中心として考え社會的なものとはかかる個人の集合であるとする。従つて社會的現象としての經濟と云うものはかかる個人的經濟の綜合として把握される。かくして社會的なものとは量的全體を意味する。併しかかる意味に於ける社會的なものとは、所謂便宜的なものと考えられる外はない。全體の質的、一と云う意義、即ちその主體性と云うものはかかる考えからは出てこない。それは個人と社會とを單に量的擴大として兩者を連續的に把えるものでしかない。かくて又この立場からは自由と云うものも先ずその所謂個人の自由を以て絶對的自由と考へ、然る後、人間は社會的なものが故に、我々は社會に於いてはかかる自由を制限し、相對的自由のみを有すると考えられるのである。私はかの歴史學派に於ける如き、單に有機的全體としての民族、國家、社會なるものに對してC・メンガーが原子論的個人を強

調した意義を認めると共に、社會的なるものを以てかかる個人の集合とする考えに同ずるを得ない。併し又個人として平均的或いは代表的個人の如きを考えるのは、物質主義的定義の思考様式への逆轉でしかないであろう。或いは又人間はその好むと否とに拘わらず一定の社會的關係の中に降り込まれ、又その限りに於いてのみ個人として社會的個人たりうると考えられるとしても、單に社會的なるもの（況してそれが單に物質的なる場合）に基體性をおく限り、個人の自由と云うものはなくならざるを得ない。更にその社會的個人と云うものは、ものが社會的であると云うのと如何に異なるのか、又如何に異つた原理に基いて考えられ抱えられるのかが明らかにせられねばならないであろう。併しこれらについて多く論ずる暇はない。唯この點に關しては私は西田幾多郎博士の「個」の原理に深く同ずるものである。

次にかかる「個人」に對應して、「もの」とは如何なるものであつたか。それは如何なる意味に於いても作らるべきものではなくして、既にあるものであり、而も自己の手中にあり、支配下に、あるものである。ロビンズの言葉を以てすれば、*“at my disposal”*なるものである。かくして前述の四條件は之を總括すれば、「自己の手中にあるものを自己の欲望へ、自己が合理的に配分する」と云うことである。所謂限界効用均等の法則はこの關聯の上に成立してゐるのである。かくの如くして、一切のものが自己に内在的なものとなる。述語的存在として人間は意識的である。意識はものを内在化すると考えられる。

かく意識に内在的なものの具體的表現が正に右の、*“at my disposal”*なるものであつたのである。そこでは人間とものとの間に何らの障壁もない。ものは決して死の面を以て我々に迫り來はせず、常に従順なるものとして、その全身を我々に獻げてゐるのである。かかるものを考えていたからこそクルーソー經濟體系はそれ自身で完結した體

系、即ち自己の外へ關係することなくして自己の枠内で統一された體系たり得たのであり、世界の自己表現點と云う意義を失つた窓なきモナドであつたのである。併しものは單に自己のものではない。單に意識に於いて内在化されるものではない。自己に對すると共に汝に對し、又彼に對するものとして客觀的なもの、環境のものなのである。ものは我々を肯定するものたると共に否定するもの、生の面を有すると共に死の面を有するものとして實在的なものである。而してこれはものが單に自然のものではなくして、正に我々に依つて作り出されたものなるが故でなければならぬ。而して又それは我々が單に意識的でなくなることはなくして、逆に意識的に深まること、更に深く述語面的に超越してゆくこととなければならぬ。ものを作ることとは一方ものをして眞に客觀的なものたらしめると共に、他方より、深き自己を知ることとなければならぬ。

經濟的局面を成立せしめクルーソー體系を完結せしめる認識の原理は、所謂内省(*introspection*)として考えられるものである。内省とは自己が自己に於いてものを見、自己を見ることである。それは單に外なるものを見、單に外なる人間を見ることに比して自覺的により、深まつたものである。そこでは客觀も單なる客觀ではなくして、主觀化せられた客觀、主觀を媒介せる客觀であり、主觀的・客觀的なものとして具體的なものでなければならぬ。併しクルーソー體系は窓なきモナドの體系であつた。これは内省なるものが所謂自己の内省であり、自己の外へ越え出ることが出来ないことと云う意味で主觀的なものたらしめざるを得ないことである。そのために内省なるものは單にそれのみでは科學の方法たり得ないことと云われる。例えばI. W. ンチソンは云う。*“no scientist can rely on introspection alone if he wants results of general applicability, while he can only communicate the results of his introspection by his behaviour or his written or spoken words”* (註)

「物質主義的定義」と「稀少性定義」の思考様式に於ける差異

茲で内省なるものが科學の方法たり得るか否かは暫く措きかかる内省に對して “empirical observation of external behaviour” を主張したとしても、かかる觀察をなす者は誰であるのか。又人間Aの内省と人間Bの内省との比較をなすならば、兩者を比較する自己自身は一體如何なる立場に立つてゐるものであるか。前述の如く内省とは對象界そのものに於いて働く自己のそれであつたのである。我々はこの内省の有する意義を見失つてはならない。併しこの考慮の上に立つて更に内省の主觀性を克服する道はないのであらうか、若し我々の人間存在なるものが自己自身を知る自覺的存在であり、而して眞の自覺と云ふものは單に自己が見ると云う如きことではなくして、我々が客觀的にもを作り、その作られたものに於いて自己を見出すと云うことであるならば、内省をば弱き自覺とし、更に述語的に深くいわば實踐的自覺と云う如きものに達すべきものと思ふ。

以上の分析を通じて私は次の如く結論したい。稀少性定義の思考様式が、物質主義的定義のそれに對し、一つにはもの孤立的把握から一つの關聯に於けるもの把握へと進み、二つには人間を單なる主語的存在としてのものから區別して述語的存在として捉え、更に根本的に第三者的認識から對象界そのものに於いて働く自己の内省へと進むことに依つて、世界をして主觀的・客觀的なものとして捉える第一歩たり得たことは、思考の具體化の意味に於いて劃期的意義を有するものと考ええる。唯、そのものと人間の關聯そのものが抽象であつたこと、及び人間が意識的なものとしてより以上に考えられなかつたとするに、更に克服されるべきものを残してゐると思ふのである。それ故にこれは單に外から否定されるべきものではなくして、内から越えらるべきものでなければならぬと思ふのである。

(註1) Robbins, op. cit., p. 11.

(註2) Robbins, op. cit., p. 16.

(註3) Robbins, op. cit., p. 12.

(註4) C.メンガー『國民經濟學原理』安井琢磨譯五八頁。

(註5) C.メンガー、前掲書八〇頁。

(註6) T. W. Hutchison, The Significance and Basic postulates of Economic Theory, 1938, P. 142.

後記

[1] 經濟とは何であるか、それは如何なる立場から考えられるか、と云う問題は經濟哲學の窮極的問題である。而してこの二つの問題、即ち所謂經濟性の原理と考えられる内容的規定の問題と、その形式的規定のそれとは、實は前者が後者を規定し、逆に後者が前者を規定すると云う意味に於いて一つの問題でなければならぬ。併しこの小論に於いては、前者は之を與えられたものと前提して論じた。その限りに於いて兩者は分別されているのであり、又その意味に於いて抽象的である。

[2] 私はここに於いては、ロビンズ自身そのものである如く二つの定義を單に並列的に論じた。併しこれらは斯く並列的に同次元に於いて論ぜらるべきものでなく、又ロビンズの如く一を取り他を捨てるべき性格のものではなくして、その各々は例えばヘーゲルの絶對理念の自己展開の如き、その展開の異つた段階として考えらるべきものであり、従つて又物質主義的定義と雖も誤謬であるのでなくして、むしろ問題はその抽象性を知ることによつて自己の限界を自覺する點にあるのであると思ふ。これらを取扱うことは後日の問題としたい。

[3] 稀少性定義に關して、私はいまここに於ける個別的具體性と云う如きことを述べたが、これには一層根本的「物質主義的定義」と「稀少性定義」の思考様式に於ける差異

に、眞に具體的に實在するものは如何なるものであるかと云うことを明らかにせねばならない。かくしてこそ始めて稀少性定義の意義も眞に明らかになるのである。ことにこれらを論ずることは出来なかつたが、これらに關しては特に場所の思想とも云われるきものが考えられなければならないであらう。

ケネーの社會思想史的一考察

植木 憲二

ケネーの「經濟表」(Tableau Economique)が經濟學上の劃期的な産物であり、ミラボーによつて世界創造以來の三大発見の一つとして、文字の發生・貨幣の案出・と並んでこれが稱揚されたことは遍く知られている。

事實、ケネーに先行する幾多の優れたる經濟學探求者の存在にも拘わらず、科學としての經濟學が建立されたのは、この「經濟表」の誕生を俟つてであると云うも過言ではない。故に、「經濟表」を中心にして、數多の専門的研究がなされ、既にその成果が解説書或いは入門書にまで及んでいることは少しも怪しむに足りない。然るに所謂社會思想史の見地よりする研究は、數指を數えるに止まつている。^(註1)従つて「經濟表」を生んだケネーの思想の根源を辿り、その哲學的認識論、及び方法論を解明し、以つて「經濟表」のもつ科學性を指摘し、同時に歴史的・社會的制約性を剔抉することが、未だに社會思想史的研究の上に重要な對象として残されていると見なければならぬ。

(註1) マルクス「剩餘價值學說史」邦譯「マル・エン全集」第八卷、第一章、特にウィリアム・ベティ、ボアギルヘルを擧げなければならぬ。